

日本と欧米における 「古さ」の概念について

フィアドタウ・ミハイル

タリン大学 文化人類学科 博士課程後期

プロローグ

2013年の初訪日
大阪城への観光・・・



どういうところが古いのか？

プロローグ



ギザの大ピラミッド(3500年)



アテネのパルテノン(2400年)

だと、昔の姿がそのまま残っているが...

合理的に説明してみれば

- 木造の建築

+

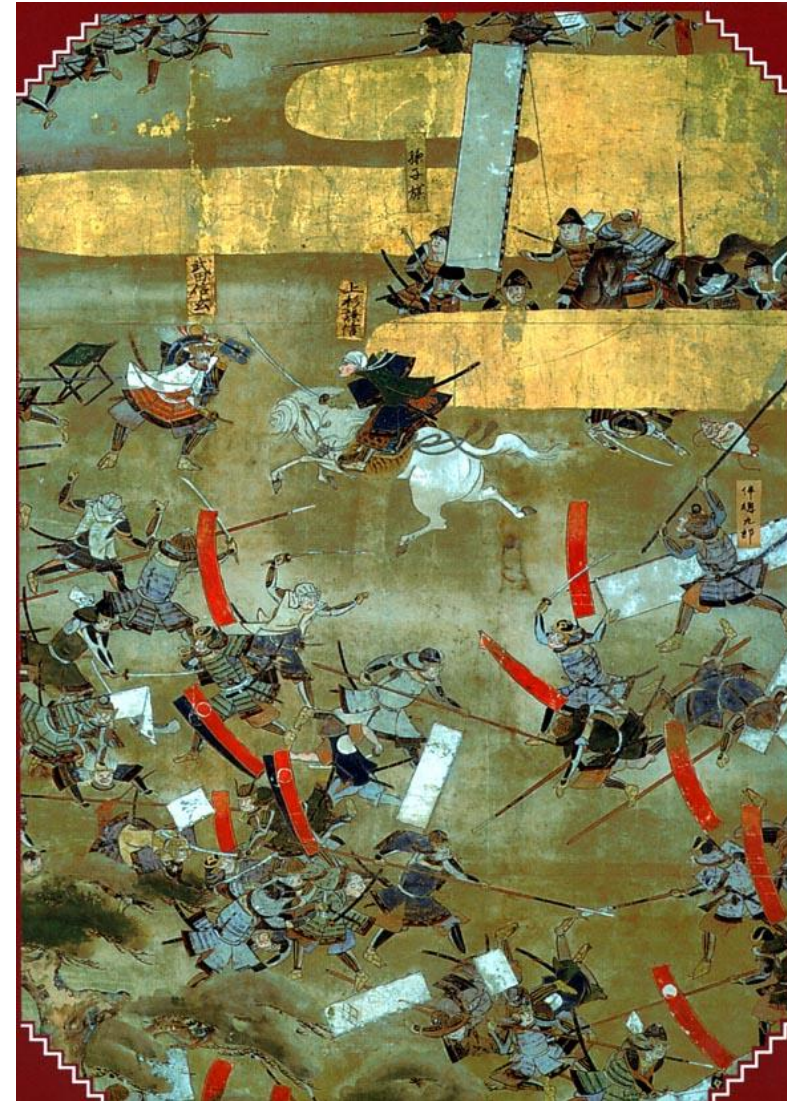
- 火事

- 地震

- 津波

- 紛争

→ 建物を何度も建て替える
必要がある。



合理的に説明してみれば



第一妙満寺



第二妙満寺



第三妙満寺 ...

- 京都の妙満寺は、何度も火災などによって滅失している(1395、1536、1628、1708、1788、1864、1945)
- 再建するたびに、その**真正性**(authenticity)を失うのであれば、大変なことなる。

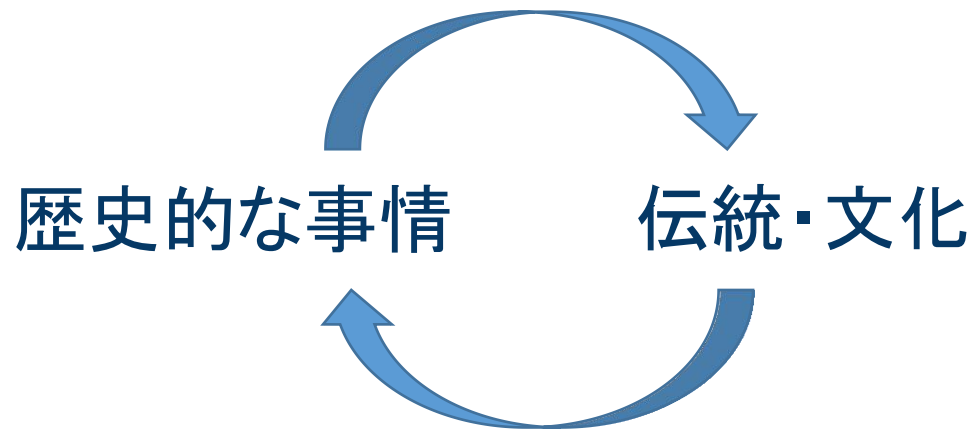
伊勢に来てから・・・

- 伊勢神宮では、**式年遷宮**によって、20年に一度内宮・外宮を新たに建て替え、神様にお移り頂く。
- それが神道の一番重要な祭りの一つである。
- 他に、**春日大社**（20年に一度の「造替」）、**出雲大社**（60年に一度の遷宮）などでも似たような儀式が行われる（もしくは過去に行われていた）。



伊勢に来てから・・・

- 伊勢神宮の建物は新しいが、遷宮という祭りは1300年を超える歴史深い伝統である。
- 建物が滅失しても、伝統は次世代に伝わっていく。



古さはどこにあるか？

- 2つの考え方があり得る。

1

- もの自体にある
- ものの物質性 (materiality) が重視される
- ものが破壊されれば、その真正性が失われる

2

- ものをめぐる伝統・信仰にある
- 伝統の持続性 (continuity) が重視される
- ものを超える真正性がある

「古さ」のとらえ方の連続体

「物質派」 ←————→ 「持続派」

物質文化論 (material
culture studies)
考古学
など

文化史 (cultural history)
民俗学
など

「古さ」のとらえ方の連続体

- しかし、物質派と持続派の関わりが強く、はっきり分けることは難しい

例1: せんぐう館・神宮の博物館などでも、考古学者の発掘したものが展示されている→物質性のある証拠も重要である

例2: 欧州の教会・お城などが工事によってその「物質性」の一部を失うことがよくあるが、持続性が強いから、同じ建物として扱われる



いずれかだけの古さ



ストーンヘンジ

物質性しかない：
何なんだろう？



エルサレムのストーンヘンジ

持続性しかない：
存在しないだろう？

持続性と変化

- 持続性の深い伝統も、変化を受け入れながら発展していく
- その時代の事情・価値観に応じて、古くから伝わってきた伝統の解釈・とらえ方が変わる
- 物質的な形も変わることがある

例: アテネのパルテノンでは、ギリシャがオスマン帝国から独立したあと、オスマンの建築・美術の痕跡が消された
→ 古代ギリシャの遺産の象徴として再解釈



持続性と変化

- 伊勢神宮も、時代に応じて変化してきたのである。

- 天皇だけのための神社として創建された
- 中世期に恩師制度ができ、一般人の参拝客が訪れるようになった
- 明治の神仏分離の結果、恩師制度が廃止し、仏教の痕跡がほぼ消された



→「純粹な伝統」や「普遍的な価値」など、あり得ないのではなかろうか。
変化を受け入れながら、発展していくことこそが、持続性の本質ではないだろうか。

まとめに

- 「古さ」という概念のとらえ方は、文化によって異なることがある
- 「古さ」の基準として、物質性と持続性が挙げられる
- 物質性と持続性が深いつながりを持っている
- 持続性の深い伝統でも時代に伴って変化を受け入れていくが、その歴史をたどることができることによって持続性が存在し続ける
- これからも、神道の祭り・儀式をはじめに、日本文化が日本文化でありながら変わっていくだろう